様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２６５２

研究課題名（和文）「やさしい日本語」データベース構築のための基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research for YASASHII NIHONGO database construction

研究代表者
前田　理佳子（MAEDA, Rikako）

大東文化大学・外国語学部・講師

研究者番号：１０３２４７３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　日本語に不慣れな人を緊急時に情報弱者にしないための実践を支えることを目的に、減災のための「やさしい日本語」資源の収集・整理、実態把握を行った。また、「やさしい日本語」の使い手となろうとする人々にとっての学習資源の整備を進めた。
　発災後72時間対応のうち、「やさしい日本語」対応の具体案が存在していない部分について、伝達媒体、伝達目的等に適合した案文等を作成・蓄積した。減災のための「やさしい日本語」の使い手育成において、モデルないしは学習資源として提供しうる案文データベースのソースの整備を進めることができた。

研究成果の概要（英文）：　To support GENSAI practice for beginner learner of Japanese language who disadvantaged in catching emergency information, I collected and analyzed YASASHII NIHONGO resources for GENSAI. And I built learning resources for the people who try to be a user of " YASASHII NIHONGO for GENSAI". On building learning resources, I focused on emergency information which prepared to send until 72 hours later after an earthquake occurs.

研究分野：日本語教育

キーワード：減災のための「やさしい日本語」　発災後72時間に必要な「やさしい日本語」　目的・対象別「やさしい日本語」の類型　談話レベルの情報構造に配慮した「やさしい日本語」　減災のための「やさしい日本語」学習資源

１．研究開始当初の背景

阪神淡路大震災を契機として始まった「やさしい日本語」研究は、緊急時の広報に「やさしい日本語」を加えるよう提案し[注 1]、日本語社会の構成員に日本語に不慣れな人とのコミュニケーションに関する認識の変容を促してきた。そしてこの間、日本語が不慣れな人が緊急時に情報弱者の立場を余儀なくされる場合が少なくないこと、多言語対応の一種としての「やさしい日本語」が減災に有益であることの２点が広く知られるようになった。

東日本大震災を経て、地域防災計画等に「やさしい日本語」使用を位置づけようとする自治体の試みが急速に増加する[2]など、日本語社会における「やさしい日本語」の認知度は高まった。それに伴って新たに「やさしい日本語」使用を志向する人々も増加した。また、減災に直結するもの以外にも、「やさしい日本語」を用いた活動が増加して、活動主体が多様化し、多様な場面における多様な「やさしい日本語」の使用例が生まれた。

しかし、研究開始時点では、目的に応じた適切な使用例が蓄積されて整理された「やさしい日本語」のデータベース的な資源は少なかった。「やさしい日本語」に関わる多様な活動主体が各々紙ベースあるいはウェブサイトに掲載した文字情報や音声情報として蓄積されたものが散在していて、これらの資源相互をつなぐハブ的な機能を果たす可能性を持つものは開発途上だった。そのため、新たに「やさしい日本語」の使い手になろうとする人々がそれぞれの目的に応じて自らの「やさしい日本語」使用の適切性について検討しようとする際に、容易に参照できる資源は、豊富とは言えない状態だった。

[注 1]　「災害時の日本語」研究グループ（1999）『災害時に使う外国人のための日本語案文：ラジオや掲示物などに使うやさしい日本語表現』新プロ「日本語」事務局

[注 2]やさしい日本語全国マップ：各地の「やさしい日本語」活用事例＜「やさしい日本語」に対する社会的評価＜弘前大学人文学部社会言語学研究室＜弘前大学 http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/syakaiteki/zenkoku_map/20140603/zennkokumapomotepdf0603.pdf　2014 年 10 月 20 アクセス

２．研究の目的

減災のための「やさしい日本語」研究[注 3][注 4]を継承・深化して、日本語に不慣れな人を緊急時における情報弱者にしないための実践を支える資源を整え、提供することを目的とした。具体的には、緊急時に「やさしい日本語」による広報活動等を行おうとする人が目的に応じて参照しうる言語資源であって、なおかつ、場面、媒体、コミュニケーションの参加者等に即した調整を行う力を養おうとした場合の学習資源となりうるデータベースを構築することを目的とした。

[注 3]　佐藤和之編（2009）『「やさしい日本語」の構造―社会的ニーズへの適用に向けて―』弘前大学社会言語学研究室　平成 18 年度～平成 20 年度・科学研究費補助金・基盤研究（B）「災害時の外国人のための『やさしい日本語』と社会的ニーズへの言語学的手法の適用」研究課題番号 15320061 研究成果報告書 pp.3-16

[注 4]「やさしい日本語」研究会編（2007）『「やさしい日本語」が外国人の命を救う―情報弱者への情報提供の在り方を考える―』弘前大学人文学部社会言語学研究室　平成 18 年度～平成 20 年度・科学研究費補助金・基盤研究（B）「災害時の外国人のための『やさしい日本語』と社会的ニーズへの言語学的

手法の適用」研究課題番号 15320061 研究成果報告書

３．研究の方法

既存の「やさしい日本語」資源を収集・整理して、特に減災に役立つ資源として開発ずみのものの種類（場面・媒体・難易度等）それぞれの実態把握と分析を行った。特に、政府機関、地方公共団体、ＮＧＯ、国際交流団体、公共交通機関、消防等によって使用された緊急情報、あるいは使用を予定して整備が進められた資料・進められつつある資料に重点を置き、収集・整理を行った。伝達媒体、伝達目的等によって多様な「やさしい日本語」が存在していたが、これらを類型化し、各々の典型例の抽出を試みた。

発災後 72 時間対応のうち「やさしい日本語」対応の具体案が存在しない部分を特定し、伝達媒体、伝達目的等に適合した案文等の作成に着手した。

４．研究成果

収集した「やさしい日本語」資源については、場面、媒体、難易度、多言語対応との連動その他の特性を比較対照し、既存の資源の傾向が概観できるリストを制作できた。この過程で、72 時間対応における「やさしい日本語」の既存の具体案の欠落部分や、伝達対象となる日本語を母語としない人々の日本語能力の設定に一貫性をもたせる必要がある部分を発見できた。また、語彙・文法項目の「やさしさ」のみならず、情報の配列について配慮がなされた「やさしい日本語」資源が不足していることを明らかにできた。

これらを踏まえ、発災後 72 時間対応のうち「やさしい日本語」対応の具体案が存在していない部分を特定し、伝達媒体、伝達目的等に適合した案文等の作成に着手できた。これによって、減災のための「やさしい日本語」の使い手を育成するカリキュラムにおいて、モデルないしは学習資源として提供する案文データベースのソースの整備に向けて、文案の蓄積ができた。

５．主な発表論文等

〔図書〕（計２件）

(1)前田理佳子（2015）「減災のための『やさしい日本語』」定延利之編著『私たちの日本語研究：問題のありかと研究のあり方』朝倉書店 pp.14-17

(2)前田理佳子（印刷中）「やさしい日本語全国マップ」「掲示物描き方規則」「『やさしい日本語』文法」横山詔一ほか編『シリーズ社会言語科学２　社会言語科学の源流を追う』ひつじ書房

〔その他〕

(1)気象庁・内閣府・観光庁「緊急地震速報・津波警報の多言語辞書」（2015 年 10 月）における「やさしい日本語」文作成協力

(2)内閣府「津波情報の多言語化に係る表現」（2015 年 10 月）における「やさしい日本語」文作成協力

(3)減災のための「やさしい日本語」とは／「やさしい日本語」案文作成ワークショップ講師（(公財）沖縄県国際交流・人材育成財団主催 災害時外国人支援サポーター養成講座第３回「災害時に役立つ『やさしい日本語』」於沖縄県浦添市、2017 年５月 27 日

(4)総務省消防庁「外国人来訪者や障がい者等に配慮した災害情報の伝達及び避難誘導のための試行訓練」（2017 年 10 月～12 月実施）における「やさしい日本語」文作成協力

(5)ＮＨＫ総合「おはよう日本」『やさしい日本語』特集（2017 年 11 月１日放送）制作協力

(6)総務省消防庁「災害情報の伝達及び避難誘導に関するガイドライン」（2018 年３月）における「やさしい日本語」文作成協力

(7)東京都オリンピック・パラリンピック準備局（多言語対応協議会）「やさしい日本語」文案作成協力

６．研究組織

(1) 研究代表者

前田　理佳子（MAEDA, Rikako）
大東文化大学・外国語学部・講師
研究者番号：１０３２４７３２

(2) 連携研究者

佐藤　和之（SATOH, Kazuyuki）
弘前大学大学院・人文科学研究科・教授
研究者番号：４０１３３９１２

(3) 研究協力者

伊藤　彰則（ITO, Akinori）
東北大学大学院・工学研究科・教授

杉戸 清樹（SUGITO, Seiju）
国立国語研究所・元所長

孫　偉庭（SUN, Weiting）
早稲田大学大学院・日本語教育研究科修士課程・学生

馬場　康維（BABA, Yasumasa）
統計数理研究所・名誉所員

水野　義道（MIZUNO, Yoshimichi）
京都工芸繊維大学・基盤科学系・教授

御園生　保子（MISONOU, Yasuko）
東京農工大学・名誉教授

米田　正人（YONEDA, Masato）
国立国語研究所・名誉所員